――個人事例――

指示を正確に聞き、すすんで物事に取り組む子

川　本　和　正

はじめに

F男は、入学当初、何事にも尻込みをすることが多かった。また、指示を正しく聞き取ることができないため、実行しても、結果的に失敗してしまい自信を持つことができなかった。しかも、相手を見ないで身体を左右にふりながら話をするため、相手に気持ちを伝えられないことが多かった。しかし不器用ではあるが、素直で真面目であり、こつこつと努力する向上心も持ち、仲間うちだけの場面では快活に情報交換をしていた。そこで、F男自身の向上心を大切にし、指示を正確に聞く態度の育成を図るとともに、何かを自分一人でなし遂げる体験を積み重ね、F男が自分の「できること」「できないこと」を認識しながら、学校生活に進んで参加する指導の実践を試みた。

1．プロフィール

(1) 生　育　歴

・昭和53年3月5日生、15歳　9か月、高等部1年（男）。

・家庭保育2年、I保育所4年、I小学校6年（算数、国語のみ取り出し授業）、H中学校（心身障害児学級）、本校高等部に入学し、現在に至る。

・父、母、本人、妹の4人家族。教育熱心だが多分に過保護、多干渉な面がみられる。

(2) 諸検査による実態

① S－M社会能力検査結果（平成5年5月実施）

生活年齢　15.2　　身辺自立　8.6　　移　　動　10.2　　作　　業　12.0

意志交換　6.2　　集団参加　9.4　　自己統制　7.4

社会生活年齢　8.6　　社会生活能力指数　56

作業能力は高いが、意志交換、自己統制に落ち込みがみられる。

② WISC－R検査結果（平成5年5月実施）

言語性　55　　動作性　68　　IQ　57

(3) 行動特性

・人の言動に左右されやすい傾向がある。

・集中力に欠け、指導者の指示を充分聞き取れないことが多く行動も遅い、従って定着も遅い。

・言葉が不明瞭で、声も小さく聞き取りにくい。また、相手と視線が合わせられず、手や身体を動かしながら話をする。

・食事の咀嚼が十分でなく、よくこぼし時間もかかる。

2．取り組みの構想

(1) 指導仮説

個人目標　指示を正確に聞き、すすんで物事に取り組む子

つけたい力
- 相手の話を注視して聞き取ろうとする力
- 自分の思いを相手にわかりやすく伝えようとする意欲
- 平仮名の正しい表記力の獲得

コミュニケーションに視点をあてた取り組み

コミュニケーションの目標

他との関わりを求め、自分の思いを表現できる子

仮　説　全身的な発達遅滞であり集中力が劣り、口を開けていたり指示を正確にくみとる事ができず失敗を繰り返し自信をなくする。そこで、少しずつやり遂げれば達成できる課題を意図的に設定し、本人の自覚と自信を獲得させることをねらった。また、学級の活動、児童・生徒会活動で培われた自信と向上心を徐々に引き出し、自ら発表したり、集団の中の自分の役割を自覚すれば、少しでも進んで他との関わりを求め、同時に集団の中の自分の客観視の芽生えがみられるのではないかと考えた。

その他の取り組み

朝の活動での10分間走やストレッチを力いっぱいして身体的な発達と、苦しくても最後までやりぬく精神力をつける。職業（陶芸コース）では、物を作る喜びと成就感をあじわい、併せて、挨拶、報告、質問、返事等の指導を徹底する。また、短時間でも毎日大きな声を出す時間を確保し、指導を継続する。

給食指導では、しっかり噛んで食べるように声かけをする。

(2) 指導方針

① 学校生活全般を通して、小さな発声や不明瞭な話し方のときは必ず言い直しをさせる。

② 指導者の指示や質問に対する応答の仕方をパターン化し、繰り返し指導する。

③ 学級での話し合い活動や、児童・生徒会活動への参加を促し、友達や先生とコミュニケートする楽しさや話したいと思う意欲を育てる。

④ 学級通信や、連絡帳、保護者懇談会等を通して家庭と連携して指導する。

3．指導の実際

(1) 生活一般での実践例

① ね　ら　い

・多くの人と交わる場面を設定し、生活経験の拡大を図る。

・できない自分に気付かせ、小さなことでも、援助を与えず一人でやりぬく経験をさせる。

② 実 践 例

a．買い物学習

○最初の実態

事前に物品購入の学習をしたにもかかわらず、Sマートで、豚肉売り場が分からず、じっと立ちつくしている時間が長かった。注文したパンを取りに来た事を店員さんに告げる事ができず、店員さんに何度も声をかけられたがなかなかできなかった。支払いも1800円計算して支払うことができず、財布のお金を全部だしてしまった。この学習を記録したビデオを見たり、友達に指摘されて、自分のできないところを認識し、次の機会には、分からない時は質問することのを指導を受けた。

○指導後の実態

目的の品物のある場所が分からない時には、すぐに店の人に質問できたが、まだ概算ができず支払いは不正確である。それ以後、事前、事後の学習では積極的に発表する姿勢がみえだした。しかし、意見発表の時、相手の顔を見て話す事ができず、身体を左右にふるくせはなおらない。また、声が小さく、言葉を語尾まではっきり言い切ることはまだできない。

買い物学習のF男

b．図書館の利用（貸し出しカードの作成）

○最初の実態

銀行の利用の学習の中で、住所、氏名、年齢、生年月日の意味と表記について繰り返し学習したので、決まった書式の用紙（2銀行のものを実施）には記入する事ができるようになった。

○指導後の実態

定着を確かめるため、事前に貸し出し申し込み用紙記入の学習はしなかった。県立図書館に出向き、手続きをする時、用紙を目の前にして、他の生徒の様子を長い間伺っていた。

新しい場面では、気おくれしてしまい、他の生徒と比べると、まだ進んで行動することはできない。

住所、氏名、年齢は記入できた。しかし生年月日の意味がわからなくなり再び立ち往生してしまった。カウンターの係員の方のていねいな応対（生年月日を誕生日に言い換えての説明）に対して、首を振り、しきりに教師の方を見て助けを求めた。分からない時は尋ねることを期待したができなかった。緊急連絡票（本校で所持を決められたもの）を見るように助言をしたところ、それを見て記入し、ようやく手続きを終える事ができた。

しかし、本の選定に時間がかかり借りる事はできたが、あらかじめ決めていた時間内に終える事はできなかった。また、係員の方の説明に対して、なにが分かり、なにが分からないのか、はっきり言う事ができなかった。そして、相手の顔を正視することもできなかった。本人は事後の反省に誕生日が分からなかった、困った時尋ねる事ができなかったと書いていた。

(2) **課題学習での実践例**

① ね ら い

・できるだけ多くの校内の先生に質問をしたり、話を聞き生活経験の拡大を図る。

・拗音、撥音、濁音、促音の正しい表記をする。

② 実 践 例

○学校紹介ビデオの取材

人との関わりが苦手なＦ男にとり、人と好ましく話ができるようになることが、今求められている課題である。そこで、校内の先生から本校の成り立ちを取材し、ごく簡単にまとめる事を設定した。最初は一問でＹ先生、二回目は二問でＤ先生、三回目は二問でＹ先生より取材した。入室、退室の仕方と挨拶は、今までの学習の中でのパターン化なので定着しつつある。しかし取材する姿勢は、相手を直視できず、メモをとることにとらわれているあまり、「わかりましたか」「もういいですか」と問い返された時、返事がはっきりできず声も小さく、経験の足りなさが伺われる。退室後、その場でメモの不足分を記入させ教室にかえってまとめ、そのまとめをグループ内で発表する。ひらがなは書けるが、うつた（うつった）・かきゅ（がっきゅう）・ごけい（ごうけい）などのまちがいがみられる。メモ程度の文が正確に書ける力、大きな声で読んだり話す力が今後の継続課題である。

４．考察及び今後の課題

各場面の実践により、わずかながらではあるが自信を獲得し、自らすすんで活動に取り組む姿勢が伺われる。後期児生会役員選挙では、担任の働きかけではあるが、同級生の応援演説をする事ができた。現場実習では、実習先の方の厳しい指導に泣きながらも最後までやりとげた。厳しい指導の中にこそ、自分をどうにかしてくださる真心を感じたに違いない。口を閉める事、食事を早く食べる事の必要感、そして、仕事の厳しさ等、新鮮な経験を積むことができた。

今、本人に必要なことは、実体験を積み重ね、自らの失敗から学ぶ事ではないかと思う。生きた学習を通し、彼なりに自分のできない事が分かりはじめている。夏休みの宿題の漢字の読みがなつけをするため、国語辞典を自分の希望で購入し使った。ここに、本人の自立への芽生えが伺えるのではないだろうか。

今後も、家庭と連携しながら家族の一員としての役割や本人がことばできちんと言わなければ家族が対応しないという態度をとることを確認し、挨拶、報告、質問が生活全般のあらゆる場面できちんとできるように指導を継続していきたい。

現場実習中のＦ男